

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第140号（2018年1月）

風に吹かれて（117）

白井啓治

・蠅梅の声に目覚めれば戌の年

一年の過ぎる速さと思うのは十二月よりも一月の方が強いようである。新しいカレンダーをめくった途端、迎えた年の希望よりも、過ぎた年のやり残しを思ってしまう。これはおそらく新年を迎えると大層な計画を考えてしまうからではないだろうか。なら一層のこと計画など持たねば、やり残した、やれなかった事への恨み節など歌わなくても済むというものだ。

だからというわけではないが、数年ほど前から私事に関しては年で考えることをやめにして、その日のことだけを考えるようにしてみた。漠然とした期限のない夢とでもいうべき思いをもって、日々に暮らすことを始めたのである。極力、あれもやらなければ、これもやらなければということ捨てて、今日のお暮しだけを考える。

ところがこれが実に愉快な日々をもたらしてくれた。何気なく毎日見ている狭い庭の中にも、とてつもなく大きな世界があつて、それが日々に驚きをもたらしてくれるのである。

日々の暮らしの大半は、保護したお犬様一人とこれもまた保護した白と黒のお猫様二人の四人で

あるが、これに来訪者として半家族になった雀ら、蜥蜴たち、それに蝦蟇蛙や蟪蛄、足長蜂、土竜などが居る。彼らとのお付き合いは、人の付き合いよりも忙しく賑やかである。当然退屈することなどない。それでちよつとばかり悟った気分、方丈の暮らしも悪くはない、などと思つてみたりもする。

年明け前のクリスマスのことであつた。美浦村の市川兄よりプレゼントが送られてきた。兄の青年期の詩集「朝の場所」であつた。本棚の隅に保管されていた貴重な在庫から一冊送つていただいたのであつた。開くなりかつての自分をそこに見たのだつた。

× × ×

十二月二十四日（日）

バカヤローを叫ぶしか能のない私だが、私にも「かつてと呼べる私」がいた。

兄よ、友よ これをどこで拾つたのだ。

私には、かつてと呼べる私があつたのだが、何処に落としてきたのか、何処で落としてしまったのか、あるいは何処かにしまい込んだのか、所在がわからなくなつていた。

兄よ、どうしてこれが「かつての私」だとわか

つたのだ。

かつての私を拾い届けてくれた兄に、どれほどの感謝を述べても述べつくせない。

しかし、間違いなく「かつてと呼べる私」がいたのだ。そして、兄は今その遺失物である「かつての私」を拾い届けてくれた。

「世代」の一節を読んだ時、かつての私が目の前に降りてきた。：革命の偉大さを教えたのが居た。戦いが起きたら何処へでも行くと云つた。馬鹿な奴だと思つた。：

これを目にしたとき、かつての私が傍にやつて来て言つた。

「童話作家になりたいと言つていた大学の後輩がいたじゃないか。彼女、ある時突然に「革命」を口にしましただろう。彼女に言つたことを覚えてるか。革命？ 何だそれは。革命つてのは自分の氣に入らない奴等を皆殺しにして自己満足の世界をつくらうとすることだ。君が革命を口にするならよく研いだドスを手に氣に入らない奴等の、君に従わない奴等の心臓に突き刺していくんだな。革命とはそんなものだ、と。お前のそんな話に影響したとは思わんが、お前が演劇の足を洗った映画の世界に行つて、しばらくしたら彼女はテールアビブに行つてしまったじゃないか」

× × ×

兄の送つてくれた「朝の場所」は、どこかに落としたか、しまい忘れたかした、かつての私を拾い届けてくれた。こんな愉快なクリスマスプレゼントは、かつてあつただろうか。不愉快の多かった昨年ではあつたが、市川兄の詩集によつて嬉しい年の暮れを過ごすことが出来た。

さて今年は愉快の多い年であることを願うばかりである。

にいとしの初めに

兼平智恵子

・いやしとぬくもりと幸多き年に
・犬も歩けば福当たる

智恵子

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

皆様にはお元気に新春をお迎えの事と存じます。旧年中は当「ふるさと風」のご愛読を頂きまして心より御礼申し上げます。お蔭様で今年は創刊より十二年目という節目を迎えることとなります。皆様のご愛読とご助言を頂きながら、更に励んでまいりたいと思います。今年もどうぞ宜しくお願い致します。

今年は戌年。十二支のうちで一番人間に愛され、ほとんどの家庭で家族の一員として暮らしている昨今です。

古代中国で誕生した干支は600年頃、日本に導入されました。幹となる十干(甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸)と、枝となる十二支(子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥)を組み合わせ使用され、動物の性格が干支の特長になるものも多く、人の性格もそれに当てはめられ、戌年生まれは勤勉で努力家とあります。

戌年の皆さん如何ですか、当はまるででしょうか？

犬の性格としては、社会性があり、忠実、人との付き合いも古く、親しみ深い動物である。その年の干支を飾ると家を守ってくれ、自分の干支を身につけると災いを遠ざけると言われている。

十二支は本来古代中国では、方角や時刻、月を表すものとして用いられ、十干を合わせて暦年をあらわすことにも使われました。十干は日を表し、三回で一か月、十二支は月として表し、十二月の月

になるので一年となります。

月を表す十二支は、動物の意味はなく無学の庶民が十二支を覚えやすくする為に身近な動物が当てられたということです。

この十干と十二支を順番に一つずつ合わせた干支からつけられた名前に興味深いのは、高校野球で有名な「甲子園球場」の甲子は、十干の最初の甲、十二支の最初の子で甲子、音読みにして「こうし」、干支が甲子の年に球場ができたので、この名前がついたとされています。

また皆さんよくご存知のことですが、犬はお産が軽いとされることから、妊婦が五か月目にしめる腹帯を戌の日が吉日とされています。

忠誠心が強く、人と深くかわかる事の多い犬達は、飼い主の異変を察知し、吠えて呼ぶなど、心温まる行動やエピソードが多い動物でもあります。石岡ではその誇れるエピソードがあります。「石岡のみんなのタロー」、石岡市東小学校から石岡駅までの二キロ余りの道を交通ルールをちゃんと守り十七年間(昭和四十年代〜五十六年まで、通い続け、石岡駅で主人を待ち続けました。

ブロンズ像として新石岡駅前で、犬と人間との美しい物語を語ってくれます。今年は特に石岡のまちに賑わいをもたらしてくれることでしょう。

十二年目の節目、今年も石岡の文化財を訪ねご紹介して行きたいと思えます。また石岡市ふるさと歴史館にては、石岡の歴史をご案内致します。企画展も行われており、最近では嬉しい事に石岡市内の皆さんのご来館が増えて居ります。そして市内の小、中、高生も多くなりました。郷土愛が育まれ、市民の皆さんが歴史を知ること、一番の町おこしになることと信じております。勿論関東内外、京都、長野、兵庫など遠方からのご来館

もあります。

入館無料、月曜日休館(祝日の場合翌日)、十時〜十六時半、お待ちしております。

この時代・この国に生きて

菅原茂美

またまた正月がやってきた。特別に芽出度いわけでも、希望に溢れるわけでもない。ただただ物理的時間の流れをやり過ごすだけの話。年寄りとはそんなもんだが、若い人達は、決意も新たに、眼光鋭く未来を見つめ、己の人生を切り開いて進まれよ！

人の一生は、いつの時代に、どんな国で生活するかによって、まるで違ってくる。同じ時代でも国が違えば、或いは同じ国でも、時代が違えば、全く異なる人生が展開するであろう。

今、世界中で、内乱などにより多くの難民が命からがら逃げまどっている。例えばミャンマーにおける軍事政権による民族浄化の話。62万人ものロヒンギヤ難民が碌な食料もなし。この寒空に寝具もなし。テントがあればよい方で、路上暮らし。乳飲み児を抱えて震えている母親をニュースで見るとつい目頭が潤む。一体その国の何がいけないのか？ 国連とは一体何のために存在するのか？ ユネスコ登録など一方の言い分を重く受け止め、相手国を著しく侮辱するような記憶遺産を登録したりするから、余計にも不信感が募る。宣伝上手の国が、控えめな紳士国を痛めつける。人間の「業(ごう)」というか、無謀な統治者が、多くの国民をき傷つける。権力のある者が、軍隊

を私物化して、反対論を封じ、勝手気ままを貫く。政府軍が国民に銃を向けるとは、一体何事だ？ ついに国民が立ち上がると、強烈な弾圧を受け、隣国などへ避難する他ない。史上何遍も繰り返してきたそれが、世界史だ。

それにつけても、人間は、生まれた「時代」と「場所」により、人生がいかにか左右されるか……

しみじみと考えさせられる。今でこそ、我が国は表面上安泰であるが、過去幾たび激動の時代を繰り返した事やら……。軍国主義の荒波により、個人の自由は拘束され、家族はバラバラ。しかも人の命は消耗品扱い。人権など正に空論。

私はあと10年早く生まれていたら、戦場の埃としてとうに消え失せていたであろう。わずか10年の差が人生を分ける。もし、戦国時代に私が生れていたなら、どんな人生を送っていたであろうか？

*

前2回にわたり回顧録を書いた。私は20世紀前半の戦中戦後、極端に窮乏な時代から、高度成長期や、バブルがはじけた後の低成長の時代を経て、今日、21世紀初頭の豊かな時代を貫き通して、正に波乱万丈の人生であった。私の親の時代は、極端に言えば縄文弥生時代とそんなに変わらない。食べるだけで精一杯。機械文明に囲まれた豊かさなどとは、およそかけ離れた時代であり、その真つ最中で私は育った。

そして我が人生後半は、テレビや車や海外旅行はごく普通。世界中の生活用品は、いとも簡単に手に入る。わずか80年ほどでこうも違う。

一方、倅の腕時計は携帯電話兼用。更に乗る物にはスイカやコンビニの自動支払いも可能。そんな腕時計があるなんて。わずか80年足らずの間に私を挟んで親と子供では、こんなにも世の中が変

わってしまった。それゆえ、20世紀を生きたわずか80年の人生で、これだけ大きな両極端の変化を体験できた世代は、これまでになかったであろう。

さて我が人生を振り返れば、『終わり良ければ総て良し』。途中で色んな苦しみもあったが、最終的に言論統制も徴兵制度もなく、自由と民主主義が確保。セレブではなくとも一応の生活は成り立ち、それで十分であったと考える。

パソコンがあれば、ネットの検索でデータが揃い、言いたい放題、なんでも文章に書ける。囲碁のソフトを買えば、高段棋力の人工頭脳といくらでも対戦できる。電化した大工道具で、日曜大工が実に楽しい。発芽率の良い種子や、肥料・農薬の改善で、素人でも色々の家庭菜園が楽しめる。しみじみと良き時代に生きていると感謝感激。

*

しかし現在の日本は、治安と衛生共に安定過ぎて、少々平和ボケ気味。軍備なしで安全保障を望むなど、たわいもない空論も多い。核の傘に護られ、沖縄の基地負担も大変だが、まずまずの安定社会に生存できる事は大いに満足。

又、巷では時々想像を絶する大量殺人などが起こり、大きな社会不安を引き起こす。老人施設や身体障害者の施設で、介護担当の従業員が、何の抵抗もできない弱者を次から次と殺す。かと思えば、自殺希望者を募り、一緒に死のうと誘い、次から次と殺人を繰り返す。実は金を奪い、若い女性を犯すのが真の目的であったという。スマホの特別のサイトを悪利用した、とんでもない社会が到来した。こんな狂気が繰り返されるとは、何たる社会病理か？

学校でのいじめや、職場での「過労死」を招く

ほどの強制労働。何が先進文明国か？ 世の中がギスギスし過ぎる。学校も職場も、もう少しまろやかで希望に満ちた明日を夢見る雰囲気になれないものか。それグローバル化だ、成果主義だと一瞬一秒を争う競争主義。速いもの勝ちの資源獲得競争。俺が獲らねば誰かに先にやられる。沿岸国でもないのに中国は、北極海底に先進開発の国旗を建て、月面にさえ領土確保を狙っているという。なんと浅ましき欲張り根性。資源は現代の人類が使い果たしてよいものではない。我らの子孫にもそれを使う権利があるはず。枯渇するまで資源を浪費する悪習は、厳に慎まなければならない。文明は、もつとスローテンポで進むべきものであらう。

社会病理に話を戻す。老人の高速道逆走とやら、アクセルとブレーキの踏み間違いとやら、更にさもない事で他者の運転に腹を立て、キレまくって進路妨害するなど、とんでもない事故を巻き起こす。キレ易いヤツに運転免許証は、氣違いに刃物だ。

米国の銃乱射事件など、狂った一個人の暴挙により大量殺人を、何度も繰り返す。人間という動物には、そんな凶悪な本性が潜んでいるとは、恐怖この上もなし。社会全体の病理として、その除去のために、何らかの手法を開発すべきだ。なにしろ米国では、建国当時の社会不安から、1791年憲法で国民に銃保持を保証しているという。米国民3・17億人に銃の数3億丁存在するとか。コンビニの数より銃販売店の数の方が多いといわれる。いかにネジを締め直すべきか、全世界の重要課題だ。

*

さて、話は変わり、『欲しがりません勝つまでは

『。戦中の標語である。雪国育ちの私は、冬には田んぼに張った水が凍り、天然のリンクができるが、その上を滑ろうにも、スケートがない。金属は戦中供出で何もなし。父は一工夫して、歯のない肉厚の下駄を木材で作り、その底に雨戸のレールを引きちぎり、先端を丸くして下駄底に打ち付け、エッジを作る。そして鼻緒を長くして足に括り付け、一応スケートの役は十分。スキーも篠竹10本ほど並べ、錐(きり)で穴をあけ、横に針金でくる。篠竹は湯につければ先を丸く曲げられる。何もない時代でも、工夫一つで何とかなる。

そして現在の私は、物書きと囲碁と家庭菜園。それになんといつても日曜大工が生きがい。創意工夫を重ね、色々なものを作るのが最大の喜び。それも幼い時、物資がなければ無いで、父のいろいろな工夫が、目に焼き付いている。大工ではないが農家の主は、馬小屋や物置ぐらいいは自分で造る。それを見て育った私は現在、物置や各種棚、ガーデンテーブル&椅子。檜丸太を刻んで鳥居を造り、お稲荷さんの鞘堂も造った。大げさに言えば創造の喜び。屋外水道の流しや調理台。それに花壇や温室。なんでも自作。

更に見よう見まねで家庭菜園。日曜朝のNHKの「野菜の時間」が私の先生。それに幼い時から、親が営んでいた農作業が、頭の底に焼き付いている。親元離れて60年近いが、子供は見えないように、親のすべての所作を、心の底にしっかりと焼き付けている。現在の私のかなり、いい加減な人生が、子や孫の目に焼き付いているかと思うと、空恐ろしい。しかし長所短所、両者を織り交ぜたのが本当の私の姿。参考にすべき長所などほとんどないかもしれないが、欠点は真似なければそれでよし。それにしても、とれたての野菜はすこぶ

るおいしい。

＊

さて話は飛ぶが、現在の日本政府の借金累積赤字は、地方も含めて16年度末1071兆円である。これは一体、誰がどうして返すのか？ ドイツのメルケル首相は、ある年度に剰余金が出たら、強い要望の道路補修金に回さず、すべてを国の借金返済に充てたという。借金というものはこれくらい覚悟がないと、次世代に先送りの悪弊となる。政府の借金は一般家庭の赤字家計と同じ。借金は次世代に先送りなど無責任すぎる。

企業の社内留保金は、16年度末(財務省発表)406兆円もあるという。これに1%ほどの税金をかければ4兆円。消費税など上げなくとも済みそうだが、それは二重課税となるからダメだという。しかし、企業にそれほどの留保金を残しうることまでの税制が、おかしくありませんか？と言いたい。企業は万が一に備え留保金を持ちたい気持ちにはわかるが、せめてその半分以上は職員の給料値上げに回してほしいもの。そうすれば所得税も増し、国の税収も伸び、借金返済に回せるはず。とにかく国はどんな手を使おうが、借金返済に全力を尽くすべきだ。諫早水門は開いても閉めても国は双方に補償金を払う始末。そんなものをなぜ造った？更に全国各地に巨大ダム。集票のための補助金バラマキ。数え上げたらきりのない無駄遣い。何故これらに巨額の投資を行ってきたのか。俺が大臣の時にあの橋を造ったとか、あの道路は俺が造った…とか事故満足のための浪費が多過ぎはしませんか？…と言いたい。人口が減っていく次世代国民に借金支払いの重荷を負わせるのは正に罪悪だ。借金増加を決議した国会議員は自己責任の弁償として、無給で働けとさえ言いたい。親父に

借金があるなら、それを返してから死んでくれ。息子に「附け」をまわすな！

政府は政権を維持するために、集票のため、補助金のバラマキなど何遍も繰り返してきた。各省庁で一度獲得した予算枠は、たとえ不要になっても、うまく項目を変えて継続確保に全力を尽くす。国家は減びても我が省庁さえ生き残れば良いとする。こんなの犯罪ともいえる。

多額の国庫補助で土地改良などしたのに、耕作放棄の遊休地にして何の反省もなく、またまた耕地整理を重ねる。後継者がなく、農地を整備しても活用のもどもなし。それでも耕地整理の予算は永遠に継続される。これは一体なんちゅうこつちや？ 食糧難の時代は過ぎたのだ。

しかし、農地には多額の予算を投じて、緑地保存して地球環境を守る…という特別の機能がある。経費対効果で簡単に判断すべきではない。農作物には、CO₂を吸収して地球温暖化を防ぐ効果がある。国は耕作放棄など、ありえないシステムの構築に全力を尽くすべきである。

現在、日本の食糧自給率は39%。これを見れば、一見農地不足で、緊急にその確保が必要のように見える。そもそも食糧自給率の低下など、国家の存亡にかかわる重大事項。60%も食糧輸入に頼る政府など、まるで国家運営の基本がなっていない。輸入相手国が日本を面白くなく、一切輸出を止められたらどうするつもりか。国民の6割は黙って死んでくれというのか。自給率80%なら、分け合って我慢し、国民は何とかして生きられる。しかし4人分の食糧で10人が生き延びるのは所詮無理な話。全く政治がなっていない。北朝鮮では兵士さえも極度の栄養失調とか。他人ごとではない。輸入を止められたら日本の事情はそれ以下かも…。

日本国民はこれまで、どうしてそんな政府を許してきたのか。国家100年の計はどうなっているのか。永遠に繁栄するためには、百年も、千年も先をしつかり見通す眼力がなければならぬ。当選さえすれば後はどうでもよいとする愚劣な議員を決して選挙で国会に送ってはならない。投票には、それほど重大な責任がある。

＊

●死について

人間は、いつかは死ぬ。生理学的には細胞分裂の回数から、人間の寿命は、およそ¹²⁰歳を限界とするらしい。歴史上ロシアの夫人の¹²²歳が世界記録とか。しかしそれは個体の命という事だ。考え方を変えれば、人類という「種の命」は永遠である。ここである永遠とは、女性なら卵巣に「卵原細胞」、男性なら精巣に「精原細胞」の生殖細胞として鎮座しており、永遠に生き続けている。成長すれば、減数分裂して、染色体数半分の「卵子」「精子」となる。この両者が合体すれば、新たな個体の命として永遠にこれを繰り返す。即ち現在生きているあなたも私も、生命誕生以来40億年、一度もこの生殖細胞は死亡することなく生き続けてきたという事。要するに個体の命とは、この生殖細胞を守り育て、成長した暁には役目を果たし、消耗品のように、消え失せていく運命にある…という事。個体とはいわば生殖細胞の奴隷のようなもの。

地球規模の重大事件があり、全生物の90%近くが減びても、残った10%から新たに種が分化して新世界が展開する。それを何度も繰り返して今日のいわゆる生物相が維持されている。

事実カンブリア期以来、5億年間にほぼ90%ほどの生物が滅亡した大事件が5回もあった。原因

は、海底火山噴火で硫酸酸化物による海水の「酸性化」である。酸欠もあれば小惑星衝突により、破壊的現象もあった。最後の大事件は、今から6500万年前、中米のユカタン半島に直径10kmの小惑星（巨大隕石）が衝突し、恐竜が滅亡した事件である。しかし2億年前、恐竜から枝分かれしていたネズミ大で、温血の哺乳類の祖先は、辛うじて生き延びた。哺乳類は各方面に岐を重ね、食虫目の中から、我らの先祖霊長類が分歧し、次々枝分かれし、最後は人類が大繁栄し、現在73億人にも達している。

地球の人口収容能力は、50億人と言われる。しかし73億人に増殖した人類は、瞬く間に百億人になる可能性がある。これから相当に頭をひねって、人口過剰による戦争を阻止していかねばならない。狼はエサが少なければ子造りをしない自律性を持つが、低能の人類は、食糧があるうがなからうがむやみやたら子造りをして人口過剰を招き、戦争ばかりする低能ぶり。

さあどうやってこれから生き抜くか？ 折角大脳を膨らましたのだから、ここが正念場。適正人口に制限し、縄張り争いに明け暮れる事なきやう、十分に頭を働かし、穏健に、近隣仲良く夢多い生活環境を整えてゆきたいもの。

地域に眠る埋もれた歴史（34）

木村進

常陸国分僧寺跡・国分尼寺跡（1）

明けましておめでとーございます。
この「地域に眠る埋もれた歴史」シリーズも33回

目となりました。これも7年ほど前からはじめたブログ「まほらにふく風に乗って」で毎日書き続けたブログ記事が二千五百件を超えてきたため少しまとめておきたいとはじめたものです。

ブログを読んでおられた方にとっては内容的には同じですが、少し変化を持たせた記事にしたいとは思っていますのでよろしければお付き合ってください。まあタイトルにあるように埋もれた歴史の掘り起しが主テーマです。今回は地元では皆知っている昔の国分寺です。国分寺には国分僧寺（一般には国分寺と国分尼寺があります。皆さんが知っているようで以外に知られていない話をしてみたいのですが…）。

（1）常陸国分（僧）寺跡

石岡駅から北西北西に歩いて約10分のところに「常陸国分（僧）寺跡」があります。少し離れての若松町の北側に「常陸国分尼寺跡」があり、この二つが国の特別史跡に登録されています。この特別史跡とは国として史跡の中でも特別重要な場所に指定するもので、茨城県では水戸の旧弘道館と石岡のこの二ヶ所合わせて三つだけです。全国でも60ヶ所程度しかありません。石岡が「歴史の里」といわれるゆえんでもあります。でもこれには少し事情がありそうです。特別史跡に登録されたのは大正11年（1922）のことです。この頃は国分僧寺の跡は見つかっても、国分尼寺の跡は見つかっていない場所がほとんどだったのです。それがここ石岡では、この両方がはっきりわかる貴重な場所と国に最初に認識されて登録されたものと思われまます。しかし今では発掘調査も進み、かなりの場所で国分尼寺跡の確認がされています。今なら登録されないかもしれません。



国分寺入り口（正面奥が薬師堂）

さて、国分僧寺と国分尼寺は聖武天皇が西暦741年に国状不安を鎮めるために各国（当時国は島国2つを入れて、68ありました）、に建立を命じた寺院です。正式名称は国分僧寺が「金光明四天王護国之寺」、国分尼寺が「法華滅罪之寺」です。そして当時の各国の国府のそばに国分僧寺と国分尼寺を一つずつ置くように命じたのです。そして自らは国分僧寺の総本山として「東大寺」を、また国分尼寺の総本山には「法華寺」を建立しました。ご存知の東大寺は国の威信を賭けてあの大きな大仏（盧舎那仏を造りました。当時としては記録尽くめの大仏で、全国から銅を集め（鎌倉の大仏は中国銭が使われたそうだけれど）何年もかかっていくつかに分けて銅（全部で499トン）を8回に分けて鑄込んで組み合わせた。またそこに金箔を貼り付けるために金の採掘が主に北関東から陸奥国などで行われ大量の金（約60kg）が集められたのです。これには百済

から来た技術者たちの力が不可欠で、百済人たちが大和朝廷に協力していたことがわかっています。国分尼寺はご存知のように聖武天皇のお后である光明皇后の意向がかなり入っているようです。法華寺の国宝「十一面観音像」はこの光明皇后がモデルとも言われていますね。

この国分寺や国分尼寺の建設するに当たって、当時の世相はどんなだったのでしょうか？

平城京を建設して当時はまだ陸奥国（仙台・多賀城）くらいまでが大和朝廷の支配下でしたが、まだ政情は安定していませんでした。そこに入ってきたのが仏教で、今までの神社の中にもこの仏教が浸透してきました。そして国中に疫病がはやり、飢餓で苦しむ人々がたくさんいたのです。そして聖武天皇は自身の幼い息子が死に、この菩提を弔うために寺（金鐘寺）を建立しますが、それが東大寺へつながります。そして、なんとかこの窮状を仏教とくに釈迦如来や薬師如来（病気を治し、苦しむ人を極楽へ導いてくれる仏様）の信仰を広めることで国を安定したいと考えたようです。しかし、号令をかけたけれど地方とて決して財政的には豊かではなく、こんな七重塔まである七堂伽藍を作るのは大変なことだったのです。建立の命令を出した6年後には各国に対して国分寺建設を督促する命令を出しています。この常陸国分寺は当時の東海道の最北の地であつた常陸国（東山道は仙台の先の多賀城が国府の陸奥国まででしたが、この国分寺の建設は全国的に見ればかなり早い方だったようです。正確な年代はわかりませんが命令の10年後くらいだったようです。

この国分寺は大和朝廷の威信を示すいわゆる「官寺」であり、大和朝廷を守る祈願の寺です。このため、一般の寺とは違い庶民は気軽に中に入

れなかったかもしれません。僧侶も国分僧寺には20人、尼寺には尼僧を10人配置していたといわれています。

近年の研究では、今まで判明していなかった七重塔の位置が、寺域東側に指定されており、寺域は、東西約二七〇メートル、南北約二四〇メートルの規模を持っていたことが明らかになっています。常陸国分寺跡発掘調査で出土した遺物は、瓦が主体で、創建瓦（複弁十葉蓮華文軒丸瓦）は、平城京羅城門（後に羅生門と呼ばれた）跡で発見された軒丸瓦と同系の紋様であることが注目されますが、石岡にはこの寺より前に建設されたという「茨城廃寺」があり、こちらで発掘された瓦文様はもつと前のもので、奈良の大安寺の初期のものや川原寺などの瓦などと比較するとかなり興味深いものが散見されます。こちらは「ふるさと歴史館」の二階に展示されていますので興味のある方は是非ご覧になってください。

この国分僧寺は中門から金堂に回廊が配置され、北への中心線に金堂、講堂が一行に並び、七重塔が東に離れた場所にあつた伽藍となっていました。この七重塔の場所については、現在の寺より東側のガラミ堂（伽藍御堂といわれる墓地の北側辺りに、かつて礎石が存在したことからこの地区に塔があつたといわれています。今は民有地で案内板もありません。

また、昭和52年の調査で今の金堂跡と講堂跡の中央西側に南北約16m、東西約10mの建物の掘り込み跡が発見され、鐘楼跡と考えられています。現在国分寺境内に残されている千手院の山門手前の右側にこの塔の礎石が置かれています。これは、昭和27年に石岡駅から水戸街道に通じる産業道路開設の工事の時に見つかったもので、重さ2

5000貫(約^{9.4}トシ)の大石でした。この石が常陸国分寺の七重塔の塔芯礎であることが確認され、これを泉町の大通りにレールとコロを敷き神楽山というロープ巻き取り機を使い6日かかりで国分寺境内に人力で運びました。神楽山はお祭りに使われていたものを利用したといわれています。

寺院の財政は、封戸五十戸、水田十町によってまかなわれていたとされています。また、昭和56年からの発掘調査で、各伽藍の基壇の規模が明らかに、寺の本堂に相当する金堂については、現在残されている基壇の約四倍の規模をもつことが明らかに、かなり大きな建造物を有する寺院でした。

建立後も外敵?により一時消失したようで、国分寺も、近くの民間寺院である「千手院」などの擁護で復興したと考えられています。しかし平将門の乱(939年)や、1590年の佐竹氏と大掾氏との戦いの際の火災で、堂塔はほとんどを失ってしまいました。

元禄時代になり本堂が再建され、かやぶき屋根の大きな山門(仁王門)も復興されましたが、これも明治41年の大火で失われてしまいました。

国分寺にあった雌雄二つの大きな鐘も、一つは江戸時代に川の工事をしていて盗まれてしまいましたし(これは石岡駅の壁画にある伝説では大泥棒が盗んで、怖くなって霞ヶ浦に投げ込んだことになっています)、もう一つ残った鐘もこの火事で熔けてしまいそれを小さな型に鋳込みなおして檀家の方へ配ったそうです。また大きな仁王像も首とか手を切り離して運び出したのですが、胴体は焼けてしまいました。今ではこの首と手が残されているようですが、これもあまり公開されることがなく、私は写真しか見たことがありません。

また、現在の本堂(薬師堂)と言われているお堂は、明治43年に十三塚の山寺の薬師堂を移設したものです。このこともあまり書かれたものがないので知られていないようです。山寺というのは徳一法師が筑波山に中禅寺(現在の筑波神社や大御堂の前身寺院を建立した後にこれを守護するために建立したと伝えられる「筑波四面薬師」の一つでしたが、今は十三塚に礎石が残されているだけです。ただ薬師像はふもとの寺(薬王院)に安置されているそうです。

江戸時代はこの国分寺は衰退してしまいかろうじて千手院という寺の末寺のように続いてきたようです。ただ官寺としての法灯はすでに失せていたものと考えられます。

癖み心

伊東弓子

新年号に載せるにしては、少し愚痴っぽいようにも思えたが、これも私の一面、年齢の所為もあるだろう、性格からくるものもあるだろうと、様々な心の葛藤をしながら、今年も確り生きてきたことを年の瀬に振り返ってみるのもいいかと思う。今年の大きな催しの中で二つ程、カチーンときたことがあった。秋の文化祭、みんな競って腕を揮い発表の場を飾り付けていた。中には喧嘩腰になるような場面もある。今回は私がそんな状態になるところだった。

展示部門の最後の会議が行われるので、私も意気揚々と「みのゝれ」へと出かけた。美の里地区の人々に「現代の霞ヶ浦」と、中世、近世の「水戸藩・玉里御留川」を知ってもらうよい機会だと

期待して足も軽かった。

ところが受付名簿に名前がない。文化祭の印刷物にも載っていない。確認に行ってくれたが、なかなか戻ってこない。始まる時間も迫ってきたので席に着いた。何もなかったかのように説明が続けられている。それもまた腹立たしい気持ちで聞いているが、勇気を出して質問してみた。その後実行委員、事務方が慌てて集まっているようだった。間もなくお詫びの言葉があつて、展示の場所も人通りの明るい所を用意してくれた。

展示も良く仕上がり、盛況の中に終わったが、今回のことで情けなかったのは、役員、会員、地区の人、市民の中から一人も「展示の場所が間違っていたね」という言葉が出てこなかったことだ。みんな他人事なのだと改めて思った。

もう一つ、歴史探訪ということで、出かけることになった。八時発、支所前、急いだが着いたのは四分前だった。人気がない。どうしたのか。乗るのは私一人か。もう一度予定表を見たり、責任者二人に連絡しても通じない。結局もう出たことがわかった。「すまなかったね」と言っただけで、気が重い一日の始まりだった。一日、寺や社を歩き、長い年月佛の前に、神の前に多くの人が祈りをささげたことを思い、私の心も清められていった。今後は、五分前には集まれるように努力しようと思った。のど元過ぎれば…にならないよう頑張ろう。

ここ三、四年、私なりの理由があつて公費を費やしての研修、旅行には行かないことにしている。ある役員会で、ある研修に「役員で参加しよう」という。会員に知らせたほうが良いのじゃないか。一人でも多くの人に知らせる必要があるのじゃないかと発言すると、正論を言うだけではだめ、実

行のみ、期限がない、と覆されてしまった。仕方なく自分の気持ちをまげて参加した。

サークルの仲間であつても、遣り繰りがつかず欠席することが多くなつてくると、仲間として相手にされない結果がうまれてくる。参加する人達で、場所を決めて市のバス利用で出かけてくる。行かない人にとってはわからずじまいだ。年齢が大きくなつて草刈り、草取りも容易ではなくなつた。新しい会員を増やす努力もしなくなり、二、三年後には会を閉じることにしたと会員以外の人から聞いた。会員という仲間意識がなくなり、組織はやがて崩壊していくのだろう。とはいえ、一会員だった私にも責任がある。最後の、二年は会を立ち上げた人の心に添つて頑張るよう参加している。

言葉の遣り取りも難しいね、と友が言う。「あんた若くていいな」と先輩に言われたので「いえ同じなんですよ。お婆さんなんですよ。おたがいにお婆さんですよ」と慰めとも労いともつかない、同じであることを強調して言つた積もりだったが、暫くぶりの会合の場で「この間、あんた私のことお婆さんつて言つたよね」と凄じ剣幕だったそう。友はどうにも納まりがつかなくなつたとか。

そういえば私も嫌な思いが残っている。久しぶりに全員揃つた楽しい場であつた。しばらくぶりの人がみんなの方へ寄つてきていた様子に嬉しい思いで「出戻りさんも揃つたし……」と言つたことが災いとなり、その後出てこなくなつてしまった。今尚、心が重い。

手紙で知らせるのも難しい。欠席の多い友に手紙を添えてポストに入れておいた。「もうやめるから」という電話には驚いてしまった。みんなのいる所で話をして貰つた。私以外の人達の言葉かけ

のお陰で一応おさまつた。しかし、おさまらないのは私。細やかな抵抗をもつて二度、会を休んで古文書の作業を外でしていた。

ある会の連絡を回覧式にしてみた。一人一人に配達をする負担を軽くするためだった。すると意味が通じなかったのか、返事が返つて来なかった。どうしたらいいだろう。一度顔合わせして来年度のことを考えていこう。

自転車で主に行動する私。自慢することもない、恥じることもない、生活の手段なのだと何を憚ることもなく利用してきたが、ここ二、三年自分でも感じることに、周りの人にも、良きにつけ悪しきにつけ心配をかけていることがわかつた。「元気でいいね」「足も丈夫でしょう」「健康にいいでしょう」と言われる。しかし、寒さの中では億劫になつてくる。それで「この頃、辛いんです」というと、暗くなつては危ないよ、迄はいいのだが「いい年をして気をつけな」には参つてしまう。それでも用があるのだから仕方がない。「自転車は車のような訳にはいかない。時間がかかるのよ。配り物、買物、用達、その他いろいろ」と一人言う。「八十近い人が、沢山背負い込んで無理してるよ」「気になるけどね。どうしようもない」には、見放されたような気持になる。「私は私の出来る範囲の気持ちで力になるよ」の優しい言葉に甘えてしまう。

粉骨碎身の精神で等と構えてやってるんじゃないか。大層自分が一人で頑張っている積もりでいたが、見るに見かねた人達の支えに助けられてきたのだとつくづく思う。よし、新しく来る年には着膨れしてしまつた衣を一枚づつ脱いでいこう。詰め込みすぎて蓋の閉まらなくなった葛籠の荷を少しづつ、誰かにあげて軽くしていこう。そうす

れば分相応の私になれるだろうか。

今迄の愚痴や僻みは、個人やグループでなんとか解決方法は見つけ出せるが、一町三市の広域、大型ごみ処理場のことはもつともつと大勢で愚痴や僻みを大きくしていかなければならないと思う。

アダムとイブの住居跡

小林幸枝

明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いいたします。

沖縄の古宇利島は、半径1キロ、一周約8キロの小さな島です。「沖縄のアダムとイブ伝説」と呼ばれる人類発祥神話があります。

古宇利島の南部シラサ岬に、男女の二人が生活をしていたという岩陰の半洞窟があります。この二人の子孫が増えて琉球人の祖となったという神話が伝えられています。

シラサ岬は、大きな岩場になっており、岩場の下にはチグマ浜と呼ばれる浜があります。浜までは階段で降りられますが、潮が満ちてくると浜には降りられなくなつてしまします。

チグマ浜では地元の人たちが泳いだりしていますが、海は急激に深くなっているのです。泳ぎに自信のある人でないと海に出ない方が良いでしょう。この浜は古宇利大橋から歩いてすぐの距離なのでお出かけの際は是非ロマンチックな伝説の残る浜を歩いてみてはどうでしょうか。

また、この島のトケイ浜には、ポットホールと呼ばれる大きな丸い穴の開いた岩が散在しており、不思議な景観を見せています。この浜は白砂で遠

浅になっており、とても美しい所です。

この白砂の浜でまた琉球踊りをしてみたいな、と再び旅に出来ることを思っています。

昔学んだ「伝統芸能の話」から

木下明男

軍国主義復活と伝統芸能

2 あたらしい「紀元節」とあたらしい「教育勅語」

戦前の絶対主義天皇制は、封建的なものと資本主義的なものと、矛盾する二つの要素を統一して成立した政治権力で、従って、それを反映した文化も、極端な国粹主義（排外民族主義）と極端な外国崇拜（対外盲従主義）と、対立する二つの要素をはっきり現わしていた。特に、思想としての封建道徳は、殆どそのまま保存され、忠義は天皇に対する絶対服従のために、孝行や貞操は家父長制の家族制度を守るために、最大限に利用されて、封建的な天皇制を支える思想基礎を作り上げていた。非常に立ち遅れて資本主義に進んだ明治初年の日本の社会は、まだ、生産力は低く、人口は多く、国内市場は狭く、明治政府は成立の時から、アジア大陸に侵略の目を光らせていた。1868年（明治元年）に、もう政府の中から「征韓論」が出ている。

1872年（明治5年）、明治政府は、学者や政府の中からさえも、猛烈な反対あつても押し切つて、2月11日の「紀元節」をでっち上げた。皇室神話を無理に日本歴史の中へ押し込んだが、同じ年に徴兵令を出しているのがその目的をはっきり示

ている。1882年（明治15年）、「軍人勅諭」を出し、ここで天皇制・封建道徳・軍国主義の三つを結びつけた。1890年（明治23年）の「教育勅語」は、この「軍人勅諭」の精神を児童や生徒を通じて全国民に押し付けるためで、当時全ての児童や生徒がこれを暗記させられた。

このように、日本資本主義は、帝国主義の段階に入る前から、軍国主義的性格を備えて、アジア大陸を攻撃し、帝国主義になってからは、益々凶暴にアジア諸民族を侵略して、太平洋戦争の終わりで続いた。1945年昭和20年の敗戦で、日本の社会に大きな変化が起こった。日本帝国主義、絶対主義天皇制、それを支える封建的要素、その基礎が大きく崩れた。力を失った日本資本主義の指導者たちは、昨日までの敵のアメリカ帝国主義に従属し、その力に頼つて、日本帝国主義を再建する方針を立てた。こうして、1951年（昭和26年）の「サンフランシスコ条約」と「日米安全保障条約」で、日本はアメリカの半ば占領下に置かれた。米・日反動は、日本軍国主義の復活に全力を挙げ、警察予備隊から戦前の日本軍より遥かに強大な今の自衛隊を作り上げた。

朝鮮戦争からベトナム戦争へ、アメリカを中心とする世界帝国主義の危機が益々深まり、アジアを中心とする戦争の危機が深まるにつれ、米・日反動は軍国主義復活に益々血眼になってきた。アジアを攻撃する軍事基地として、軍需工場として、日本の地位が益々重要になつたからです。然し憲法を改悪して、元の天皇制を復活し民主主義を大きく後退させなければ、軍国主義復活は困難です。そこで無理やり「紀元節」の「建国記念の日」を復活し、その思想的基礎として、新しい「教育勅語」の「期待される人間像」を国民に押し付けて

きた。学校教育・社会教育・家庭教育を通じて、ファッショ的な軍国主義思想を徹底しようとしている。

「期待される人間像」は、忠・孝を中心に天皇への絶対服従を国民に強制する「教育勅語」の本質を、巧みに包み隠しながら、そのまま受け継いでいる。国家の「象徴」である天皇を尊敬し社会と家庭を大切にしようと言葉で、愛国心を要求しているが、それが古い軍国主義・国粹主義の偽の愛国心であることは、今の日本が、アメリカに半ば占領され、最も不幸な民族的運命に陥っている事にも、米・日反動の指導でまたもや戦争に巻き込まれる危険な道を歩きつつある事にも、全く触れていない点に、はつきり現れている。「期待される人間像」は、この偽の愛国心を振り翳して、米・日独占資本の最大限利潤のために、日本人民の思想と肉体を戦争の方向へ駆り立てようとするものです。

（つづく）

【風の談話室】

《特別寄稿》

命の河を遡り

田島早苗

（11）二階級特進

「ご主人さまには何時も優しくしていただきました」「喪中の御葉書を頂くまで何も知らなくて申し訳ございませんでした」

「せめてご焼香だけでも」と訪れた夫の部下だつ

たと言う女性二人。

「何時も奥様やお子様、お孫さんのことを話しておられました」奥様が色々活躍されているのをとても自慢されてました「奥様が演劇をされた時の話とか、俳句の話、陶芸が好きでジョイフルで粘土を買って来て部屋中泥だらけにして花瓶や皿を作って居る事など一杯話していただきました」

「えっ：！そんなことまで話していたの？」

「お孫さんの名前の由来も聞きましたよ」何時も冗談で皆を笑わせて：「二人が交々に語る生前の夫の姿は、会話の少なかつた夫婦の日常からは想像も出来ない別人だった。

若しかしたら自分は夫の本当の姿を全く知らなかつたのかもしれない：。

まだまだ先の事だと長期看護体制を整えた矢先に、あっさりと逝ってしまった夫。

あれから二か月、何を見ても夫田村正一の思い出に繋がってしまう。

岐阜市の中心街で震災に遭つた田村家は、斎藤道三ゆかりの地、鷺山地区に造成された市営住宅街に住んでいた。戦後の混乱期を経てバラック同然の家だけど、買い取ることが出来、敷地一杯建て増しをした二階家のお蔭で庭もなく、両隣との境は体を横向きにしなければ通れず、玄関前の一坪が駐車場のコンクリートになって居る殺風景な家だった。

生まれた家のしがらみから抜きたい一心で、合い結婚に踏み切つた早紀の新婚生活はここから始まった。

好奇心だけは人並み外れていた早紀は、出勤する夫のバイク音が遠ざかると、柱も梁も剥き出しの掘立小屋の様な二階へ上がり、そこにおさめられている長持ちや漆器類、立派なお道具などを眺

め、在りし日の隆盛だった田村家を偲ぶのだった。

それらは田舎へ疎開して戦火を免れたものばかりで、長持ちの中には袴や長袴、銅の鏡、裾綿の入つた昔の花嫁衣裳らしきもの等々お宝一杯だった。漆器類の高足膳や会席膳の揃いが収められた木箱、揃いの椀を収めた木箱が、幾種類も並んでいた。

銅製の飾り手火鉢、茶釜、多くの掛け軸、その他もろもろが、広い二階を埋め尽くしていた。そこは一世紀も逆戻りした時間に浸れる早紀の大好きな空間だった。

相手の事を知ろうと努力した新婚生活では、物珍しさも手伝つて、無口だと勝手に思い込んでいた夫の代わりに、本当は饒舌ではない早紀が自分を鼓舞しながら田村家のすべてを知りたいと質問することが多かった。

岐阜県羽島郡下羽栗村無動寺に生を受けた正一の父は、代々続いた総名主の家業に身が入らず。大正十年、広大な屋敷を整理して岐阜市へ転居、お茶を商いながらお点前、華道、俳句など趣味三昧に日を過ごし、時代の流れの中で財産をほとんど失くしてしまったと言う。岐阜市へ転居後に生まれた正一は無動寺の事は何も知らなかった。

戦後の農地改革で、不在地主の農地は小作人に開放され、学生の頃、わずかに残つた畑を守るために野菜作りに駆り出されたことが、正一と故郷との僅かな係わりだとか。

早紀と結婚した時には、その畑の所在も定かではなく、既に両親は亡くなり、姉達も他家に嫁ぎ、独りで暮らしていた夫は、すべてに無関心だった。同じ鷺山の住宅街に、無動寺の出身と言う人が住んでいて「私たちは立派なお屋敷の前を最敬礼して通つたものです、本来なら若奥様とこんなに

親しく話など出来ませんでした」と話しかけられ、貧乏育ちでがさつな早紀は驚きながら、無動寺と言う地名が頭にこびりつき、『いつか必ず夫のルーツ探しに出かける』と密かに誓っていた。

正一は娘五人の後ようやく授かつた男の子だったから、舐めるように可愛がつて育てられ「何でも欲しいと言う前に出て来た」「一度も不自由だと思つたことが無かつた」とか。夫の生活態度は、貧しい日々を強く生きて来た早紀には、すべて物足りなく、何事にも消極的で、部下に対しても、へらへらとお世辞を言つたりする姿を見る度『どうしてもっと男らしく堂々としていられないのか』と歯軋りを噛むことが多かったが、不平不満は胸の奥に押し込めていた。職場の同僚、上司、部下に対しても目一杯気を使い一生懸命な夫を批判したりしたら、何かが壊れてしまふような脆さを感じ、自分の気持ちをぶつけることが出来なかつた。それが習いとなつて、夫婦喧嘩を一度もしなかつた早紀達だった。

今思えば、思い切つてぶつかり合つてみれば、もっと別の夫婦に成れたかもしれないが、早紀自身も小さい時から、目一杯背伸びして生きて来たトラウマを抱えていて、素直に心情を吐露することが出来なかつた。

三人の子供は早紀に任せつきり、「大事な節目に意見を求めても「そうだなあ」の一言で、自分の意見は返つてこなかつた。

誰もが「良い人だった」「叔父さんの怒つた顔は一度も見ることが無い」と追想する。今から思えば、あれが夫の精一杯の生き様だった。優しさに包まれ、いつもお世話をしてくれる姉様方や従業員に囲まれて、何不自由なく育てば、自分から事を荒立てる事も無く、何も主張しない人生が別段

不自然だとも思わなかった筈で、夫婦の物差しは初めから食い違っていたのだった。

正一の五人の姉の内、長女は既に亡くなっていたが、すぐ上の姉が始めたシルクスクリーン印刷の仕事を手伝っていた夫は、「正ちゃん」と呼ばれて相変わらずお姉さま方の庇護を受けていた。

休日になると二人の子供を連れて出かけても、姉の家に預け、自分はその頃のめり込んでいたパチンコに出かける事もあったらしい。でも、それが夫の唯一の息抜きだった。

子供達が小学生になると、従弟たちと長良川に泳ぎに行ったりするのも、何時も御姉様達と一緒にだったが、それはそれで子供達の楽しい思い出に繋がっている。

三人目の姉夫婦が茨城県で印刷業を興し、手伝って欲しいと言われ、二の足を踏む夫を励まし決断したのは早紀だった。

六年生の時、早紀が英霊の写真の前で口ずさんでいた『予科練の歌』の、でっかい雲の湧く霞ヶ浦が呼んでいる気がしていた。

長女が四年生、長男が二年生、二女は生まれて間もない昭和四十二年の春、田村家は茨城県稲敷郡美浦村の住民に成った。もう後戻りできぬよう家屋敷を処分し、背水の陣を敷いての出立だった。二階に埋もれていたお宝は、屑屋さんにとんど只同然で引き取ってもらい新規まき直しの意気に燃えていた早紀も、世間知らずのお人好しだった。

因みにあの頃『お宝鑑定団』の様な番組が在ったら、若しかして？と思ってしまう今日この頃の早紀だった。

義兄の会社で営業の仕事を手始めに常務取締に成った夫は、義兄に「良い人だと言われるだけ

では：」と歯がゆがられながらも、自分なりの方法を見つけて一生懸命生きてきたのだと思いつ返し、胸の奥が痛くなる早紀だった。

早紀が俳誌にエッセイの連載を始めた時全面的に協力してくれたのは正一だった。

貴重な休日を潰して方々訪ね歩く早紀の我が儘に、嫌な顔一つ見せないでアッシーを務めてくれた。でも、興味なさそうな夫を見て、『一緒に楽しんでくれたら：』と不満だった、全く自分勝手な早紀だった。

一足先に退職した早紀は、六十歳を境に、遅まきながら地域に関わり出し、出不精を卒業してボランティア活動や公民館の講座に参加、充実した日々を送っていた。

どんなに予定が一杯でも、自分では食事の支度をしない夫の為に、店屋物でない食事を用意するのが唯一早紀の矜持だった。

「退職してからでは遅いから、何か趣味の会に参加するようにしたら？土日の講座もあるし」仕事一筋で何もない夫を気遣い、しきりに勧める早紀に「勤めが終わったら考える。今は其れ所じやないよ」と言い暮らして居た正一だった。

退職した正一は、当座は腑抜けの様になつて、第二の人生に踏み切るのに時間がかかったが、幸い印刷の同業者の会合で知り合った気の合う仲間とお付き合いが続き、隣の旅行やカラオケ、体操などを楽しみに、活き活きと出かけるようになり、早紀もホッと胸を撫で下ろしていた。

美浦の人々と関わりを持たない夫が不満だったが何も言えない早紀だった。

軽い脳梗塞で夫の動作が少々不自由になった頃、早紀が右手首を骨折、毎日接骨院へ通うのに、本数は少なくともバスがあるからと言っても、「大

丈夫だから」と車を出す夫。甘えていた早紀だったが、駐車する時のハンドル捌きがおぼつかなく、ハラハラしながらの毎日だった。夫がこれ以上運転をするのは無理だと思い、治療途中で通院を止めた早紀だったが、その頃から正一の症状が悪化、歩くのも覚束無くなり始めた。

子供達が計画して親子五人水入らずの那須旅行が実現したのはその年の秋だった。

果たして歩けるかと危ぶまれた正一だったが、何処までも続く紅葉に包まれ、サファリパークで動物と触れ合い、お猿の曲芸を楽しみ、次第に正一の顔が明るくなっていった、そして、杖を頼りに歩き通したのだった。

夫の終の旅行と覚悟を決め、皆がはしゃぎ、楽しみ、感動一杯の旅だった。

「周りに波風も立てず家族を愛し、精一杯自分らしく生きた正一さん、貴方は二階級特進の宝鑑一等賞です。長い間有難う無動寺の事は心残りのままで、時間切れですね」

(続く)

《読者投稿》

やさと暮らし (11)

さと女

・芸術文化に浸る

水戸までお芝居「斜行」を観に行く。昭和38年に発生した、吉展ちゃん誘拐事件を舞台化したものの。6人の登場人物が迫力ある演技で熱演、ただただ果然と、凄かった。ギタリスト宮下祥子さんのご主人は、水戸芸術館演劇部門芸術監督の井上桂さん。そんな縁で、今回宮下さんから招待されました。彼女は東京でのレッスンがありお会いで

さず残念でしたが、井上さんにお会い出来、水戸芸術館がより身近なものに感じられ、楽しみが増えました。

翌日には、羊肉レストラン「ひつじの郷」のジャズコンサート。今回はギターとコントラバスとクラリネットの演奏、不定期ではあるがここでのコンサートも10年を越した。ひつじの肉を頂きながら響きのいい、ログハウスの中で生音を楽しんだ。今回はママさんの誕生日と重なりハッピーバースデーから始まった。ママは多趣味で日本舞踊はプロなみ、ダイビングは60半ばから始め、今では海外の海から沖縄の海へと飛び回っている。因みに、年齢は丁度になった、と言っていました。想像すると、還暦+成人式かな。薪ストーブで体も暖まりママの意欲に元気を貰い、で更に心地よさを貰い星空の中、家路に着きました。

・囲炉裏

寒い季節、鍋の美味しい季節になりました。囲炉裏の炭火が真っ赤になると、大鍋に野菜（白菜、ネギ、大根、里芋...）を入れて、コトコトと煮込みます。いつの間にか部屋中にいい匂いが。知り合いの骨董屋さんから、お豆腐を貰ったので夕食はけんちん汁となった。昨日のお豆腐がまだたくさんある、豆腐ステーキがいいかな。牛肉を炒めてあんかけにしても、中々美味しい。次は何をつくるうか、豆腐三昧に頭を悩ます。

以前、ネットで岩手の切り炭を買っていたが、八郷でも炭焼きをしている人がいる事を知り、今はその炭を使っている。「ひつじの郷」Tさんに、いつも買ってきて貰う。炭火は柔らかくて暖かく、出来るだけ無駄にせず利用している。サツマイモ、ジャガイモ、里芋、玉ねぎなどをアルミホイル

に包んで炭火の中に入れて置くとふつくとやける。焼きおにぎりなどじっくり焼くと実に美味しい。寒い季節には、こんな事も楽しみの1つです。

・晩秋の楽しみ

12月に入り、楽市さん主催のバスツアーに同行した。7時半潮来の道の駅出発、一路房総方面へ、昼食は、海鮮やカニを思いっきり食べ、モミジロードを走って君津市の濃溝の滝へ、神秘的な雰囲気の中を散策し、その後亀山湖の紅葉を眺めながらのクルージング。紅葉はもうしばらく楽しめそうです。

柿岡公民館の文化祭で友人の作品を見た後、駐車場に戻るとメタセコイアが目に入った。大分落葉していた、その後楽市さんのログハウスに向かうと、此処にも何本ものメタセコイアが、赤茶色に紅葉しており、これから落葉の季節に。葉が落ち切ると、寒々しい季節に突入ですね。その楽市さん、今ログハウスの改装中。友人から、裏（西側）の景色が見えたらいいねと言われ、早速部屋をぶち抜き、トイレや洗面所を移動、大きなガラスをはめ込み西側の山々を眺められるようにするという。完成すると3方の景色が楽しめる。周りには人家も無く、空を仰げば、パラグライダーが色とりどりに、これぞ人生の楽園かな？

昨夜の強風で樺の葉っぱもすっかり落ちた。枝だけになった木を仰ぐと、今年もいよいよ終わりだなと寂しい気持ちになる。1ヶ月にわたる落ち葉との戦い、この3本の大木、なんと、お隣さんから伸びているものです。

彼方此方の田畑から煙が漂っています。オレンジ色に染まっていた柿畑もすっかり葉を落とし、枯れて落ちた葉を野焼きしているのです。その煙

が風向きによつては横に流れ幻想的な景色にかわります。柿畑が綺麗になるといよいよ今年も終りますね。

・こんこんギャラリー

会場いっぱい、組み木絵レリーフの作品が展示されていた。何種類もの木（素材）をそのままの活かし、組み合わせ、物語を作っている。出来上がった作品から、木の温もりが伝わって来た。

別の日、今度は、小田島さんの木工と絵画展。寒風吹き荒ぶ中ギャラリーに入るとそこは別世界。珈琲コーナーもあり、小田島さんの作品が沢山展示されていた。大勢の小田島ファンがコーヒーを飲みながら談笑をしている。作品は暖か味のある優しいものが沢山。ゆっくりしていると、筑波山の向こうに陽が落ちてきた。

・霧の中

早朝目覚めて外を見ると濃い霧が、近所の牛舎の灯りが薄ぼんやりとさせている。こんな日でもコロちゃんは何時を通りの散歩をせがむ。私はぬくぬくと囲炉裏のそばで、炭火の利用を考えていると、冷凍庫に梅の実が入っているのを思い出した。梅ジャムを作りながら、直火には薩摩芋を入れて、暫くすると部屋中に、いい匂いがしてきた。

今日はストレッチの日、車を走らせるとスバラシイ墨絵の世界が、山々は刻々と姿を変え思わず車を停め見とれてしまった。

数日掃除をさぼったら凄惨な事になっていた。落ち葉の絨毯、上を見上げるとあらかた葉は落ちていた。もう少しの辛抱だ。熊手と竹箒と袋をもって美容体操、美容体操と唱えながら落ち葉掃き。

亡くなった母は90歳までこの作業をしていた。た
いしたものだ。私はもう根を上げている。
積もった落ち葉の中にすっぽり体を埋め猫が寝
ていた。そこだけそのままにしておいた。

・コロちゃん寒い

早朝、吐く息が白い。畑には霜、おそらく気温
は2〜3度かも。世間のワンちゃんは家の中でホ
ットカーペットで、ヌクヌクと暮らしているの
でしょうが、コロちゃんは17年もの間寒風の中。今
日は小屋の外でブルブル震えていた。布を掛けて
あげると何時間もそのままにしていた。身にまと
っている毛皮も年と共に薄くなり寒さが伝わる歳、
なんだろうなあ。

・食事会諸々

エコクラフトの仲間と女子会。カフェはなな
ザ専門店へ。はなのオーナーのみちこさんは、東
京時代の友人、念願のお店を開き多くのお客さん
に愛されている。女子会なのに何故か男が一人。
今日のおすすめ4種類を食す。コーヒを飲みなが
ら雰囲気を楽しんだ。クラフト仲間の1人は福島
からの避難者、同じ境遇の方と話をしたいなあ。
毎年恒例の兄弟会、今年の1月4日に亡くなっ
た夫の兄、一周忌を兼ねての会。両親が亡くなっ
た後、疎遠になることを心配した義兄の提案で年
1回の全員集合も36回目。5人兄弟のまとめ役だ
った義兄がいなくなってしまうが、来年も元氣
で会えることを願って解散となった。

楽市さんから、美味しい生ラーメンがあるので、
食べに来ませんかとお誘いがあつた。空は青く晴
れわたり、ログの中はポカポカと暖かい。楽市の
みつこさんは料理が好きでこの春迄レストランを

開いていた。今回もとても美味しい昼食を頂いた。
社長は部屋の改装中で寒風の中頑張っていた。コ
ーヒタイムは夫の誕生会となった。明日は夫の
誕生日、はて？いくつになるのやら。月1回恒例
のcfeオリーブでのコンサート、バンドのメンバ
ーもお客さんも元気に、今年最後のコンサートを
迎えられた。今回は石岡を中心に県内あちこちで
活躍しているEnioさんをゲストに迎え彩を添え
てもらった。嬉しい事に夫の誕生日と重なりハッ
ピーバースデーの演奏で皆さんにお祝いして頂い
た。何とも豪華な誕生日だった。

・趣味色々

今日は竹細工の日、朝8時半工房へ向けて家を
出る。朝の寒さは格別だったが、太陽が昇ると工
房の中は、ムンムンする程の暑さ、着ている物を
2枚脱いでしまった。湿らせてある竹ひごで今回
も蕎麦簀作り、お客さん用をあと2、3枚作りた
い。3枚目の今回はやや、手際よくなったかな？
編むときに、竹を固定する重りに、師匠はレー
ルを切った物を使っている。先日、骨董市で2千円
で売っていたのを見かけた、今思うと買って来れ
ばよかった。

真冬並みの寒さ、わずかに射した陽だまりに猫
まつたりとしている。お隣のお婆ちゃん、我が家
の座る椅子もそんな猫ちゃんに占領されて…。

ジャスコで買い物をしていると、知人に声をか
けられた。これからリハビリ体操を始めるとの事。
聞いてみると、空いている店舗を利用して月1回
の予定で、今回が初日だという。指導員の資格を
持った方4名とサポーターする指導員数名で2〜
30名の方が集まっていた。石岡市では10年前に
このような会が結成され、60数か所で行われてい

ると説明されていた。時間があれば体験したかつ
たのだが。

《風の呟き》

仇討ち談義

打田昇三

現代では死語に近い「江戸の仇を長崎で討つ」
という諺もあり、明治維新以後に法律が整備され
る迄は、やたらと仇討が行われていたらしい。

其の中でも日本三代仇討ちと称して「①曾我兄
弟による富士の裾野の仇討」「②四十七士の吉良邸
討ち入り」「③剣豪・荒木又衛門による伊賀越えの
仇討」が有名であり歌舞伎・講談・小説・映画な
どで広まっている。近代でも長谷川伸先生最後の
作品には三百件以上の仇討史料が収録されており
其の中の百数十件は江戸時代の記録らしいが江戸
時代に仇討が多かった訳では無く、其れ以前の史
料は残って居ないのであろう。或いは、江戸時代
には幕府が朱子学などに基づく道德教育を重視し
た為に「武士道の鑑」として「許可を得た仇討」
が盛んに行われたのかも知れない。

幕末の安政三年（一八五〇）には、平和な町であつ
た石岡でも旧暦一月二十八日の凍て付く真夜中に
仇討事件が起こったらしい。場所は柿岡街道へ向
かう香丸町交差点付近であらう。暖かい日中に実
行すれば…と思うのは野次馬根性で、討つ方も相
手の隙を狙うので時間指定は出来ない。此の事件
で討たれた人物は菊蔵と言う髪結い職人であるが
実は越後・新発田藩の下級武士である。理由は知
らず数か月前に同僚の家に押し掛けて母親と姉を
斬り逃亡したと言うから凶悪犯である。

どういふ訳か石岡に潜伏していたのを探索中の

少年武士が苦勞をして探しあて本懐を遂げたのである。江戸勤務であった伯父が助太刀している。此の時に府中（右圖）藩の役人が公正な扱いで親切に対応したので新発田藩に感謝されたという。美談が少ない？（失礼）石岡の貴重な話である。

忠臣蔵余話

打田昇三

年末のテレビは忠臣蔵に関わるものが多く、襲われた吉良上野介が役目を笠に江戸城中で浅野内匠頭を苛めたのが発端と言うことになっている。上野介は「高家筆頭」という職務にあった。「高家」とは、本来は摂政関白の家系、或いは室町時代の將軍一族を呼ぶ名称であるが、江戸時代は幕府内の儀式を司り、將軍の名代として伊勢神宮・日光東照宮に参詣し京都（朝廷）への使者に立つ。

吉良の家系は祖先が足利氏で、徳川家康の伯母の系統でもある。紀州徳川家や有力大名とも親戚関係にあった。其の為に万石大名よりも官位が高く四位の少将まで進むことが出来た。然し禄高は四五〇〇石、身分地位と禄高を一緒に与えない徳川家康の遺した政策によるものである。

此の収入だけでは格式の高い任務は務まらないから複雑な江戸城中のしきたりなどを新参大名に教えて謝礼（賄賂）を貰う。「賄賂」と言うよりも非公式に認められた報酬である。どの大名も厄介な任務を命じられたときは、先ず吉良邸へ挨拶に行つたらしい。勿論、賄賂持参であろう。若い浅野内匠頭は清廉潔白で裏の事情を知らなかったから裏面対応が出来なかったのかも知れない。（聞かなければ誰も教えてくれない閉鎖社会である）

現役時代の私の上司で、奥さんが江戸時代から

続く大きな畳屋の娘という方が居た。講談・浪曲などで知られる江戸城の急な畳替え事件（吉良上野介の嫌がらせ）は実際にあったらしい。

現代は公明正大で「賄賂」などと言う言葉は死語になった……と思うのだが、それでも時折は新聞に記事が載るから根絶はしていないらしい。吉良さんの「それ見たことか！」と言う声がする。

ボトルネック効果の怪

菅原茂美

この件については17年2月号にも触れたが、遺伝学用語の「ボトルネック効果」とは、「遺伝子多様性減少」を意味する。ある生物集団が急激に個体数を減らした時、群れの多様性が減少し、次世代が均一化する現象をいう。

なぜ今、こんな事を書くかというと17年11月29日未明、北朝鮮が2か月半ぶりにまたもミサイルを発射したからである。なぜにこうもしぶとく、国際道義に反する暴挙を繰り返すのか。

北朝鮮国民の遺伝子に多様性があれば、いかに独裁政権が強行しようとも『いやそれは止した方がいい』という反対意見が多少出てもよいはず。同じ漢字圏で、中朝韓日とも、論語の「仁」により政治がなされるべきとの教えがなされたはず。なのにそれを無視して、暴挙を連発する北朝鮮。一体その国民性とは何なのか？

700万年前、アフリカで誕生した人類の祖先は、今から7万年前、脱アフリカ。わずか150人ほどの黒人小集団でアラビヤ半島に辿り着いた。これが現在の全人類の祖先ホモサピエンスである。少数の先祖を共有するゆえ、全世界はみんな親戚のようなもの。アラビヤ半島に辿り着いて間もなく、

人口が1万人ほどに増えた頃、インドネシアのトバ山が大噴火。地球は煤煙で日照不足。長期寒冷化が進み、多くの動植物が死滅した。人口も1万人から1千人ほどに急減。

さて残ったこの1千人は、一体どんな性格の人々であつたか？それが問題である。しかし科学者達はそんな事にはあまり触れていない。

そこで私の仮説。1万人から1千人に激減する時、おとなしい紳士的な性格の人は、気性の激しい、人を蹴落としても自分だけ生き延びようとする猛々しい性格の人々に押しやられ、猛者のみが生き残ったに違いない。私の主張は少々過激かもしれないが、言葉を代えて言えば、利己的で独善的な「ずる賢い者」のみが生き残った。即ち、猛者だけの均一化に収斂。そういう者の子孫が今日の人類の太宗を占める事になった。北朝鮮のみが特異という訳ではなく、全人類が戦争ばかりに明け暮れる、悲しい運命（さだめ）を背負う遠因になつたに違いない。

そういう強烈な性格の集団ゆえ、後に全世界に拡散するエネルギーを保持できたと思う。北に走ればUVカットのメラニン色素が減少し、白人となり、ネアンデルタール人と混血。金髪と青い目を受け継いだ。東に進めばアボリジニに。北東指向はモンゴロイドとなった。

コロンブス以降の西欧人は、南北アメリカ大陸の先住民9000万人の9割を殺害し土地や財産を奪い去った。オーストラリアのアボリジニ対策もわかり。広島長崎での常軌を逸した原爆投下。ナチス・旧ソ連・真実はよくわからないが南京事件・ポルポト事件・アジア・アフリカでの内乱による大量殺戮事件など、人間の魔性を如実に示す事件が多発。人類から闘争がなくならない過酷な

現象を見れば、人類とは、かなり凶悪な遺伝子を背負い込んだ動物と言える。

人類は折角大腦を膨らましたのだから、強烈な「魔性」を克服し、穩健な人口を増やして、全人類が平安で、この世に生まれてよかった……と安堵する世界を築いてゆきたいものである。

【特別企画】

打田升三の私本・平家物語

卷第七・(二・2)

平家山門連署(へいけさんもんへのれんじよ)のこと

「旭(朝旦)出て二十余年の夢はさめ」という古川柳がある。旭將軍と称した木曾義仲に依つて平家は都を追われたのである。大局的に見れば平家のように一族だけを大事にする政権が長く続く道理が無い。現代の政治でも理屈は同じである。

都に向かって進撃して来た木曾義仲は、何となく気になる比叡山の僧兵軍団を手紙一本で味方に就けてしまった。それを真似た訳では無いが平家も源氏と対決する前に比叡山を抑えて置こうと、仰々しい手紙を書いた。前の二章段は「手紙」が主題であるから無駄に長いだけであつたが、此の章段も似たようなものであることをお許し頂く。

当然ながら木曾軍が誘惑したことを知らない平家は比叡山を抑えて置こうとした。「奈良の興福寺と三井寺(園城寺)は平家を恨んでいるが、延暦寺には悪さをしておらず、恨みも無い筈である」と日吉山王権現(大師)をお願いして三千の僧兵を味方

に就けようとした。木曾義仲と違つて平家一門には無駄な肩書を有する公卿がいる。其の連中の名前を十人ほど連ね仰々しく花押(サイシ)を付けて比叡山に送った。

「敬つて申し上げる。平家は延暦寺をもつて氏寺に準じ、日吉の社をもつて氏社としてひたすらに天台の仏法を仰ぐべきこと。」

右は当家族の者達が殊に誓うところである。なぜかと言えば比叡山は桓武天皇の御代に伝行大師(最澄)が唐に学び帰国した際に伝えた天台の教理である。「円頓の教法」を此の場所であつて、毘盧遮那仏が説く天台密教の教義を伝えて以来、仏法繁栄の聖地として国家を守護する道場と定められたからである。今、我が国は伊豆の流人である源頼朝が自分の罪を悔いることなく逆に朝廷を侮辱して反乱を企てた。そののみか、其の企みに同心を致す源氏の者どもが木曾義仲、源行家以下、徒党を組んで各地に起こり、諸国に侵入して領地を奪ひ年貢や産物を略奪している。

是に対して平家一門は朝廷の命を受け累代の功を負い、弓馬の道に従つて逆徒征討に尽くしているところであるが、各地の戦場に於いて利を得ず苦戦を強いられている。もし、是らの合戦に神明仏陀の加護を得られれば反逆の凶徒を鎮圧することが出来る。その為には一向天台の仏法に帰依し、日吉の神恩に頼み入るのみである。その故は忝くも臣ら(平家)の遠祖を思えば延暦寺創建発願の桓武天皇の末裔である。その事からも平家一門は延暦寺を粗末には出来ず大切にすることのみである。

是からは山門に良いことが有れば平家の喜びとし社家に怒りあらば平家の怒りとして子孫に伝えてゆくことを誓う。藤原氏は春日神社・興福寺を氏社、氏寺として法相宗を広めた。平氏は日吉社・

延暦寺を氏社・氏寺として尊敬し誠の「円頓の教法」の教義に従つてゆく。興福寺(藤原氏)の信仰は昔のもので家の為のものに過ぎないが、平家は天子の為の祈願を行う。

仰ぎ願わくは、山王七社・王子眷族七社の末社、東西満山護法聖衆(全山の菩薩)、薬師如来、日光月光菩薩、医王菩薩(つまり、誰でも良い、全ての神仏)平家一門の真心に照らして奇跡を現わし給え。そうして頂ければ邪惡な逆臣どもも全滅させることが出来る。

依つて、平家一門の公家たちが揃つて礼をなしお願いを致す。

從三位行兼越前守平朝臣通盛

三位行兼右近衛中将平朝臣資盛

三位行左近衛中将兼伊予守平朝臣維盛

正三位行左近衛中将兼播磨守平朝臣重衡

正三位行右衛門督兼近江・遠江守平朝臣清宗

參議正三位皇太后宮大夫兼修理大夫加賀越中守平朝臣經盛

從二位行中納言兼左兵衛督征夷大將軍平朝臣知盛

從二位行權中納言兼肥前守平朝臣教盛

正二位行權中納言兼出羽陸奥按察使平朝臣頼盛

從一位平朝臣宗盛

壽永二年七月五日

敬白

肩書に「行」とあるのは、その地位よりも身分が高い事を現わしているらしい。お願いするのに偉そうな肩書を並べたのでは当然ながら相手にされない。此の手紙を見た延暦寺の貫主(座主)卷第二「座主流」に登場した明雲大僧正、再任は、自業自得とは言つても落ちぶれた平家が気の毒になつて直ぐには披露せず、山王七社の一つである樹下社で三日間の祈禱をしてから僧兵たちに見せたのである。不思議なことに手紙が収納された木箱の蓋に初めは無かつた次の歌が書かれており、

「平らかに花咲く宿（もと）も年経（としふれば）西へかたぶく（傾く）月とこそなれ」とあった。

日吉山王の大師が憐れまれて、三千の衆徒に平家への助勢を示唆されたものと思われるが、平家の所業が神慮にも背き人望にも沿わないことが多かったのも、同情はされたが平家に従うと言う者は居らず「既に源氏に味方をする」と、申し入れたことを変更は出来ない！」とする結論が出た。

なお、平家の手紙で差出人が「朝臣（あそひ）」と書いているのは古代の「かばね」を示し、朝廷から賜った姓であることを示した。しかし、次第に使われなくなっており、落ち目の平家が使うと哀れさが増すだけで何の意味も無い。序に述べて置くと連署にあった人物関係は次のようになる。

平宗盛＝清盛の子、平家頭領

頼盛＝清盛の異母弟（源頼朝を助けた池禪尼の子、後に頼朝に優遇される）

教盛＝清盛の異母弟、巻第三「赦文」に登場
知盛＝宗盛の次弟、平家では此の人が一番、

しつかりした人物のようである。

経盛＝清盛の次弟

清宗＝宗盛の嫡男

重衡＝しげひら、知盛の弟、暴れる平家の指揮を執った。

維盛＝重盛の嫡男、後に入水自殺する。

資盛＝すけもり、維盛の弟、此の人は織田信長の祖先とも言われる…

通盛＝教盛の子

主上都落（しゅじょうのみやこおち）のこと

主上とは天皇のことであり、此の場合は安徳天

皇になる。天皇が貧乏な庶民の真似をして「夜逃げ」をするのである。尤も年齢が四歳であるから記憶には残らないが、生きて戻ることも出来なかった。平家の一員にされたが故の悲運である。（母親は平清盛の娘・建礼門院徳子）

寿永二年（一一八三）七月十四日、平家物語巻二「殿上の闇討ち」に登場した忠臣・家貞の子である肥後守貞能が九州方面の謀叛を平定し、菊地（藤原系）原田、松浦などの九州勢三千騎を召し連れて都に戻ってきた。その功によって九州方面は辛うじて平家の勢力下にあるが、東国や北国の反乱（平家に対する抵抗）は止まなかった。

同年七月二十二日の夜中近くに、平家屋敷のある京都六波羅（東山区六波羅密寺付近）が騒々しくなった。馬に鞍を置いて腹帯を締め家財などを運び出す者たちが右往左往しており、まるで敵の軍勢が攻め寄せて来たような騒ぎになった。暫くして騒動は収まったが、その原因は次のようなことによるらしかった。

美濃源氏（清和源氏本流・多田満仲の弟である満政の子孫）に佐渡衛門尉重貞と言う者があり、保元の乱に加わって、鎮西八郎為朝が崇徳上皇方に付いて負けたのを捕えた褒美に兵衛尉（ひょうゑのじょう）から右衛門尉（えもんじょう）になったのである。どちらも位階は同じであるが衛門府の方が天皇に近い場所を護る。其れだけの事だが源氏一門に嫌われ平家に尻尾を振っていた。その重貞が六波羅に掛け込んで来て急報した。

「木曾義仲の大軍が既に北国から五万余騎で攻め上り、比叡山から東坂本（大津）付近にかけて満ち溢れております。そのうち榎の六郎忠親と書記の大夫坊覚明が六千余騎で比叡山に登り説得をした為、三千の衆徒（僧兵）は源氏に付いて都へ攻め

入ることとあります…」

負けている事は分かったいたが、それ程早く攻め込まれると思つて居なかつた平家は大慌てで取り敢えず各地に討手の軍勢を差し向けた。先ず大將軍として新中納言と呼ばれた平知盛に、弟の本三位中将重衡（ほんざんみちゅうじょう）三位は大将の位階であるが中将なので此の様に呼ばれた）が付いて三千余騎を率い大津へ出る街道筋の山科に陣を置いた。越前三位通盛と能登守教経は二千余騎で宇治橋を固め、左馬頭行盛（さまのかみゆきもり、早逝した清盛の二男の子、左馬頭は現在なら国土交通省の高官、此の人物は歌人として知られた）に薩摩守忠教が付いて二千余騎で淀（た）阪へ通じる街道に陣を置いた。

攻め寄せる源氏、とは言つても本命の頼朝軍では無くて、どちらかと言うと出張所程度の規模の木曾義仲の軍勢であるが、先ず新宮十郎藏人行家が数千騎で宇治橋から侵入して来ると噂された。更に足利系の祖先に当たる陸奥新判官義康の子で上野国に住んだ矢田判官代義清が京都西京区の大江坂を越えて来ると言う。その他、摂津・河内（大阪近辺）の源氏が大軍で押し寄せる、とする情報が出てきたが、冷静に考えると平家軍は防衛出来ないほどの勢力では無いのである。

しかし、打ち続く敗戦で気弱になっているから「緊急事態であるから、兵力を分散せず一つになつて戦おう！」と各地に派遣していた軍勢を都に呼び返した。中国の文集に「帝都名利地、鶏鳴無安居」帝都是名利の地、鶏鳴いて安きことなし」

つまり「都は、名声や利益を追い求めるの汲々として鶏の鳴く早朝から心の休まる暇もない」というのがある。平穏な時代でも其の様に言われているのに乱世では尚更である。京都に軍勢を集めてどうするつもりであろうか。吉野山の奥にでも

籠った方が良いと思われるが、諸国七道（全国）が平家に背いてしまった今は、何処にも平穏な場所が無い。法華經に「三界無安猶如火宅（さんがいむあんゆによかたく衆生が生死輪廻する迷いの世界は火に燃える家）」と言う、釈迦如来の口から発せられた悟りの言葉がある。（平家はもっと早く此の事に気付くべきであった）

寿永二年七月二十四日深夜に平家の頭領である前内大臣宗盛が、建礼門院（安徳天皇生母）の居られる六波羅殿に参上して次の様に申し上げた。

「源氏の蜂起に依つて世の中が騒がしくなつて居りますが、未だ其れ程の心配も無いと思つておりましたところ、此の所、急に情勢が緊迫して参りまして安徳天皇を都の中にお留めするのは危険と案ずる者も居ります。万が一にも天皇に危険が及ぶことは避けなければなりませんので、後白河法皇と共に天皇にも西国にお移り頂くほかは無いと判断を致しました。どうか御承知下さい！」

全てが天皇の為に在つたような時代に「夜逃げの勧め」をするのであるから、是は誰でも驚く。建礼門院も心中には「何でそうなるの！」と呆れながら「良く分からないが、そなたの言う通りにせねばなるまい！」と涙ながらに然もお上品に答えるしかなかった。原文に「御衣の御袂（たもと）に余る御涙、せきあえさせ給はず（止めることが出来無かつた）」とある。当然のことで、そういう場合は驚くか、泣くかの、どちらしかない。宗盛も自分の不甲斐なさ確かめるように泣いていた。

平家は後白河法皇も一緒に連れて行くつもりでいたのだが、役者が上の法皇が是に従う筈が無く、事前に宇多源氏系の公家・按察大納言（あぜちのたいな）に「民情視察が職務の按察使を兼ねる大納言 源資方の子である右馬頭（馬寮の長官）資時を供にして密かに御所を脱出し鞍馬に逃れた。」

平家の武士で橘内左衛門尉季康（きつないさえものじょうすえやす）と言う抜け目の無い人物が居り、院にも仕えて其の夜は宿直勤務であつた。法皇の御座所の辺りが騒がしいので近寄ってみると女房たちが泣いている。聞けば「法皇のお姿が見えない！」と言う。慌てて平家屋敷に報告をしたので、宗盛も大急ぎで法住寺殿へ駆け付けたけれども一緒に居た筈の丹後局（法皇の愛人）が呆然として居ただけで法皇の姿が無い。

その中に「法皇の姿は都の中に見当たらない」とする報告が来て平家を落胆させた。法皇が一緒になければ都を離れる平家の立場は弱いものになるのである。天皇と法皇とを同行させていれば源氏も、攻めることが出来ないであろう。平家の目論みは破れた。「致し方ない。天皇だけでも、お連れして行こう！」と翌日の早朝に都を発つことにした。安徳天皇は未だ六歳であつたから何と言う事も無く輿に乗られ、生母・建礼門院が付き添われた。皇位の象徴である三種の神器、天皇の印、時計（當時の、楽器などは忘れぬようにと、平大納言時忠（平時子の兄）が厳しく命じていたのだが急かされて忘れる品も多かつた。天皇の御座所に置かれていた剣なども忘れてしまった。

やがて平時忠、その子・時実、養子の信基らが威儀を正して供をし、輿の綱を引く者は正装し、正式に従う近衛の役人は鎧兜に身を固め武装して従つた。行列は六波羅から七条通りを西へ進み朱雀通りを南に行幸した。（都から落ちて行つた）

明けて七月二十五日、銀河の掛かる空は早くも白々と、雲は東嶺にたなびき、明けの月は白く冴えて鶏の鳴き声も忙しく、夏の日は明けようとしていたが、京都の市民は天皇が夜逃げをしたなどと言う事は知らない。治承四年には福原遷都が慌

ただしく行われたが今にして思えば、あれは今回の「都落ち」の前触れであつたのかも知れない。

摂政は天皇の代理でもあるから、藤原基通は平家一門では無いが仕方なく（夜逃げの行列に従つていたが、七条大宮に差し掛かつた時に髪を左右に分けた「みずら髪」の童子が牛車の前を横切る姿が見えた。その者の左の袂（たもと）に「春の日」と書かれており、是は春日大明神（藤原氏の氏神、興福寺の鎮守）のお使いがお護り下さるのかと、心強く思つたところに、その童子らしい声で歌が聞こえた。

「いかにせん藤の末葉の枯れゆくを

ただ春の日にまかせてや見ん」

平家の夜逃げに付き会ふのかと、言われているような気がして、供の列に居た進藤左衛門尉高直（しんどうさえものじょうたかなお）を呼び寄せ「……どうも様子を見ると天皇は居られるが法皇のお姿が無い。是は先行きが不安である……」と言えば、高直は牛車のドライバーである牛飼いに、そつと目くばせをした。牛飼いは心得て、平家の連中に見つからないように方向転換をして都へ引き返し北山へ向かつて紫野の知足院という寺に隠れた。此処は近衛家の庇護を受けた寺である。

維盛都落（これもりのみやこおち）のこと

此の章段の主人公、維盛は「返牒」などの章段に出ているように、平清盛の後継者で早死にした平重盛の子である。本来ならば此の人が平家のリーダーになるのであるが、未だ若かつたから伯父の宗盛が清盛の後を継いだ。主だった平家の者は現代用語で言う「疎開」をしたのであろうから維盛だけが「都落ち」を責められる謂（いわれ）は無い

のであるが、維盛は家族思いで有り、特に奥方が巻第二で流罪にされた藤原成親の娘で二重三重に親族の別れを経験している。

平家物語には書いて無いが、平重盛の北の方は藤原成親の妹で、平家都落ちの際「主上都落」の章段に出てきた肥後守貞能に守られ重盛の遺骨を持って常陸国に来る。筑波山麓を中心に勢力を保っていた多氣大掾氏の比護を受け、城北町の小松寺で重盛の供養をするのである。

本文に戻ると、前章段で脱走？した摂政・藤原基通のことが平家一門に知られ、直ちに追っ手をつけるように命令が下された。越中次郎兵衛盛次が命令を受けて追い掛けようとしたのだが周りの者から「よせよせ！」と言われて思い留まった。

小松三位中将こと維盛は、兼てから平家が都を捨てなくてはならないと、覚悟をしていたけれども、いざ其の時が来て見ると何とも悲しい。奥方は今は亡き中御門新大納言藤原成親（巻第二・大納言死去）の娘である。原文には「桃顔露にほころび、紅粉眼に媚（こ）びをなし、柳髪風に乱るる…」などと書いてあるが、つまり評判の美人…と言うことで有ろう。維盛との間に「六代御前」という十歳の男児と、八歳の女兒が居た。

事務的な言い方をする、平家の命令は「家族同伴」なのであるが、維盛は道中の苦勞と将来のことを思うと平家の命令には背くが「單身赴任」を決めている。出かける維盛を追って縋（すが）る家族を前に、奥方に言い聞かせた。「日頃から言っているように、私は一門に従って西国に落ちて行く身である。家族を連れて行きたいけれども途中で敵が待ち構えているので安心して道中が出来る状況では無いから一人で行く。もし、私が討死する様な事が有っても其の様な知らせを聞いても尼にな

るとか仏門に入るとなどと言う事が有ってはならない。どの様な人で有ろうと護ってくれる人が居れば、再婚をして子供たちを育てて貰いたい。助けてくれる者は必ず居るであろう…」と、ようやくに宥めたのだが、北の方は返事も出来ずに、その場に伏せてしまった。

出かける時刻が来たので声を掛けて屋敷を出ようすると、北の方は維盛の袖にすがりながら、「都には既に父母は居らず（維盛に）見捨てられて後は誰に再婚しようとも思っていない。それなのに、どの様な人にも護つて貰え、などと仰せになられることが悔しゅうございます。生まれる前から結ばれる運命であればこそ、貴方に愛されることも他の誰に情を掛けて貰う心算は有りません。何処までもお供をして、同じ野原の露と消え一つ底の海川の藻屑になろうと契（ちぎり）を結んだことは偽りだったのですか…せめて我が身一つであれば、捨てられる悲しさと諦（あきらめ）もしますが、幼い子たちを誰に託し、どの様にせよ、と仰せなのですか。家族を残して行かれることが恨めしく思われます（どうか一緒に行かせてください）」と、涙ながらに訴えたのである。

維盛は亡き重盛の嫡男であるから平家一門の宗家であり、本来は中心に位置する人物なのであるが「武家の頭領」には向かないため、指揮官の地位は叔父の宗盛に移っている。此の場合も気丈な人物ならば一家総出で「夜逃げ集団」に加われれば良いのだが追われる平家の先行き不安から其れが出来ないのである。維盛は言葉を改めて言った。

「思えば貴女は十三、私は十五の年に結ばれて、火の中、水の底までも共に入り共に沈み、寿命が尽きる迄は共に生きると誓ったけれども、今回の様な敵の襲来で都を去ると言う不測の事態では、

常に戦場に置かれるのと同じことで貴女や子供を危険な目に遭わせることになる。その上に、今度の場合は全ての面で十分な用意も出来ず都を去るので行く先も決まらない不安な道中になる。何処かに落ち着いたならば必ず迎えを寄こすので其れまでは辛抱をして貰いたい！」

それだけ言う、と維盛は思い切るようにして屋敷の中門を出た。其処で家臣が捧げる鎧を身に着け馬を引きよせて乗ろうとした。北の方はその場に泣き伏していたが、若君と姫君は走り出て父親の鎧に取り付き「父上は、いずこに行かれますか。私も共に！」と、面々に慕い泣きをして離さなかった。維盛も、辛さは子に劣らないから為す術も無い。その中に維盛の弟である新三位中将資盛、左中将清経、左少将有盛、丹後侍従忠房、備中守師盛の五人が乗馬の俣で門の中に乗り入れ、庭に控えて「兄上の到着が遅いので行幸（安徳天皇の行列）は出発をされ既に遠方まで行かれました。今まで何をして居られたのですか！」と口々に質した。維盛は馬に乗って門を出るところであつたが、引き返して縁側の近くに馬を寄せ、弓の端で簾（すだれ）を掲げて言った。「この様に幼い者たちが余りにも慕うので、是を何とか有（な）めるのに時間が掛かって遅れた…」と言え、庭に控えていた家臣たちも、哀れんで涙を流した。

是で出発が出来るところ、どうせ遅刻したのだから、と言う訳でも無いが此処に「斎藤五、斎藤六」と名乗る兄弟が登場して、折角、其の気になった維盛の馬の轡（むち）に左右から取り付き「どうかお伴をさせて下さい」と頼んだ。兄は十九歳、弟は十七歳で、この兄弟は北国で討死した斎藤別当実盛の息子である。維盛は心中に嬉しく思ながらも次の様に言つて兄弟を留めさせた。

「そなたらの父は北国に出陣する時に、しきりに頼んだのに（思うところがあると）そなたらを残して討死をした。その理由は此の度の様なことを察していたからであろう。実盛は古い武者であり平家がこの様な状態になることを予期していたのである。此の度も私が六代御前を残してゆくについて、安心して頼める者は、そなたらしいない。どうか理を曲げて（無理にでも）此処に残り私の居ない後の家族を護って欲しい！」斎藤兄弟は致し方なく、維盛の命に従った。

北の方は「夫の維盛が」是ほど薄情な人とは思わなかった。」と嘆き、改めて涙にくれた。若君姫君はじめ仕える女房たちは、維盛の去った後も一目もはばからず声を上げて泣き叫んだ。維盛の耳には、その声が何時までも残って、是から落ちて行く西海の浪音、風の音に聞こえたであろう。

平家は京の都を捨てるに当り六波羅、池殿、小松殿、八条、西八条などの武家屋敷から一門の公家が住んでいた屋敷など二十余か所と家臣の住居宿所を始め、付近の民家まで一度に火を掛けて、悉く焼き払った。（是では滅びても仕方が無い）

（続く）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡 13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

あけましておめでとうございます。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）※入会に関するお問い合わせは右記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター、いしおか育ち他で販売しております。お問い合わせは、編集事務局へ。



ふるさと風の文庫の主な作品

- ・打田 昇三…打田昇三全集（全6巻）、
歴史の嘘、私本平家物語、
私本将門記他
- ・兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、
ふるさと風のことば他
- ・伊東 弓子…風の景他
- ・小林 幸枝…風に舞う他
- ・菅原 茂美…遙かなる旅路（1、2）
- ・木村 進 …地域に埋もれた歴史シリーズ
（全24巻）
石岡地方のふるさと昔話、
茨城のちょっと面白い昔話他
- ・白井 啓治…皇帝ペンギンの首飾り、
霞ヶ浦の紅い鯨、
朗読/ふるさと物語…他

ふるさと風の会編集事務局

〒315-0001 茨城県石岡市石岡 13979-2

林家とんでん平新春寄席

2018 年 1 月 13 日(土曜日)

第一部（八軒台・新鮮野菜・石岡そだち）11 時開演：入場無料（投銭ご祝儀）

第二部（石岡市・まちかど情報センター）14 時開演：入場無料（投銭ご祝儀）

林家とんでん平

先代林家三平師匠の最後の弟子で手話落語の第一人者。デンマーク、ロシア、中国で手話落語公演を行う。2016 年 7 月に、日本縦断 3000 キロ行脚寄席で、石岡市に寄られ、新鮮野菜いしおかそだちで、野菜に囲まれての高座をもたれ、聴覚障害者の方々と健聴者の方々が一緒に大笑い。石岡では今回二度目の公演。新春にふさわしく、垣根なしの初笑いをお楽しみください。なおとんでん平師匠の前座として、石岡に生まれた「手話舞」を小林幸枝が演じます。



（2016 年 7 月 新鮮野菜「石岡そだち」にての公演）